

使徒言行録 通 読

5月



(5月30日)「使徒言行録 27:39~44」

残りの者は板切れや船の乗組員につかまって泳いで行くように命令した。このようにして、全員が無事に上陸した。(使徒言行録 27章 44節)

- ・朝になりました。暗闇に光が差し込むとき、わたしたちは大きな安心感を得ることができます。彼らの目に飛び込んできたのは、砂浜のある入り江でした。しかし彼らはそこに行く途中、浅瀬にぶつかってしまいます。
- ・「もう大丈夫」と思って進んでいたときに、また暗礁に乗り上げる。まるでわたしたちの人生のようです。その状況の中で、船員は囚人を殺そうとします。勝手に逃げ出したら大変だし、自分たちの責任を問われると思ったのでしょう。
- ・しかし百人隊長は、それを思いとどまらせます。パウロも囚人の一人だったのでその命を助けたかったのか、すべての人を守るという神さまの約束を信じたのでしょうか。そして結果的に、全員が上陸することができました。

(5月31日)「使徒言行録 28:1~6」

体がはれ上がるか、あるいは急に倒れて死ぬだろうと、彼らはパウロの様子をうかがっていた。しかし、いつまでたっても何も起こらないのを見て、考えを変え、「この人は神様だ」と言った。

(使徒言行録 28章 6節)

- ・パウロたちが流れ着いたのは、シチリアから 100 kmほど南にある小さな島マルタでした。マルタの人たちは、難破船から泳いできたパウロたちに対して、非常に親切に接してくれたようです。
- ・そのときパウロの手に、毒蛇(前の聖書では「蝮」)が噛みつきました。蛇はアダムとエバの物語にも出てきますが、悪魔の化身とも考えられ、恐れられていました。その蛇が噛みつくのだから、きっとパウロは悪い人間だと人々は考えます。
- ・まさに「因果応報」という考え方です。しかしパウロの身には何も起こりません。蛇を火の中に投げ入れ、涼しい顔をしているパウロのことを、人々は続いて「神さまだ」と言います。パウロはそれを、否定したのでしょうか。

(5月1日)「使徒言行録 22:17~21」

すると、主は言われました。『行け。わたしがあなたを遠く異邦人のために遣わすのだ。』(使徒言行録 22章 21節)

- ・パウロの弁明は続きます。彼はエルサレムにいたときに、「我を忘れた状態」になったといえます。聖書には恍惚状態になって異言を語る人も出てきますが、神さまが直接語り掛けられるときにはそのようになるのでしょうか。
- ・パウロは神さまからこのように言われたと、はっきり言います。「エルサレムから出て行きなさい」と。それは神さまについてパウロが証しすることを、エルサレムの人々(ユダヤ人)が受け入れないからだと言います。
- ・さらにパウロは、神さまは直接自分に語り掛け、異邦人の元に遣わされたと言います。あなたたちユダヤ人と同じようにキリスト者を迫害していたわたしが、神さまが直接遣わされたのだと語るのです。この言葉をユダヤ人は、「冒涇」と感じたかもしれません。

(5月 2日)「使徒言行録 22 : 22~30」

これを聞いた百人隊長は、千人隊長のところへ行って報告した。「どうなさいますか。あの男はローマ帝国の市民です。」 (使徒言行録 22 章 26 節)

・パウロはここで、伝家の宝刀を抜きます。パウロは自分がローマの市民権を生まれながらにして持っていることを伝えたのです。当時、世界で大きな勢力を誇っていたローマ帝国の市民であることは、大きな後ろ盾となりました。

・実際大隊長は、多額のお金を出してローマの市民権を得たそうです。しかしパウロはなぜ、そのことを今まで黙っていたのでしょうか。市民権のことを口にすれば人々の態度が変わるということを、パウロは知っていました。

・しかし最後まで、地上の権威には頼りたくなかったのかもしれませんが。でもこのまま拷問にあうことで福音を宣べ伝えられなくなることは、どうしても避けたいことでした。ギリギリのタイミングで、パウロは市民権のことを語ったのでした。

(5月 3日)「使徒言行録 23 : 1~5」

パウロは言った。「兄弟たち、その人が大祭司だとは知りませんでした。確かに『あなたの民の指導者を悪く言うな』と書かれています。」

(使徒言行録 23 章 5 節)

・ローマの大隊長は、自分でパウロを裁くことをためらいました。イエス様も逮捕されたとき、ユダヤの大祭司からポンティオ・ピラトの元に身柄を移され、最終的には群衆にその判断が委ねられました。

・パウロの場合は、ローマの市民権を持っている人間を簡単には裁けないという理由がありました。そこでユダヤの祭司長や最高法院の議員たちの前に連れて行くことにします。どのような罪を彼らがパウロに定めるのか、知ろうとするのです。

・そこでパウロは大祭司アナニアに向かって、「白く塗った壁よ」と言います。見かけだけきれいにして中身はどうなんだという強烈な皮肉です。パウロは「あなたが大祭司だとは知りませんでした」と言いますが、恰好を見ればすぐにわかったはずで

(5月 28日)「使徒言行録 27 : 27~32」

船が暗礁に乗り上げることを恐れて、船員たちは船尾から錨を四つ投げ込み、夜の明けるのを待ちわびた。

(使徒言行録 27 章 29 節)

・1 オルギアは約 1.85m です。パウロの乗る船は、水深 37m から水深 27.75m へと、明らかに島へと近づいていきます。ただそれに気づいたのは真夜中のことだったので、暗礁に乗り上げないために夜明けを待ちます。

・暗闇の中で自分の思いだけで行動しても、上手くいかないことが多くあります。イエス様は光として、わたしたちの人生の中に介入されました。その光をたよりに、わたしたちは歩みたいものです。

・そのとき船員たちが、小舟を使って船から逃げ出そうとしました。自分たちだけ助かればいいという考えが、そこにはありました。しかしパウロはそれをやめさせます。大きな船を動かす人がいなければ、全員が助からないからです。

(5月 29日)「使徒言行録 27 : 33~38」

だから、どうぞ何か食べてください。生き延びるために必要だからです。あなたがたの頭から髪の毛一本もなくなることはありません。

(使徒言行録 27 章 34 節)

・マタイによる福音書 10 章 30 節に、「あなたがたの髪の毛までも一本残らず数えられている」という聖書の言葉があります。神さまはそれほどまでにわたしたちのことを愛し、守ってくださるということです。

・パウロも船にいた人たちに、「あなたがたの頭から髪の毛一本もなくなることはない」と約束します。その約束を信じ、泳ぐ体力をつけるために、ずっと我慢していた食事をするようにしなさいと勧めるのです。

・船には 276 人もの人が乗っていました。その人たちを養うための食料の備蓄は、たいへんな量だったでしょう。食事のあと、それらの備蓄も海に捨てます。少しでも船を浮かせ、陸地に近い場所まで進むためです。

(5月 26日)「使徒言行録 27 : 13~20」

幾日もの間、太陽も星も見えず、暴風が激しく吹きすさぶので、ついに助かる望みは全く消えうせようとしていた。

(使徒言行録 27 章 20 節)

- ・穏やかな風に誘われ、船は出港しました。しかし間もなく、暴風が吹き荒れます。わたしたちの人生においても、同じようなことが起こります。大丈夫だろうと安心していたら、ひどい目に遭ってしまうことが起こるのです。
- ・エウラキロンは、日本でいう台風のことでしょう。今のように気象衛星によって、その進路を解析することなどできません。またパウロたちが乗っていたのは、2000 年前の船です。暴風の中ではひとたまりもなかったでしょう。
- ・彼らは積み荷を捨て始め、そして船具も投げ捨てます。しかし風は止まず、彼らは希望をも見失ってしまいました。パウロの言うことを聞いて、冬の出航を断念すべきだったのです。でも今は、そんなことを言っている場合ではありませんでした。

(5月 27日)「使徒言行録 27 : 21~26」

ですから、皆さん、元気を出しなさい。わたしは神を信じています。わたしに告げられたことは、そのとおりになります。

(使徒言行録 27 章 25 節)

- ・案の定、パウロの言ったとおりにになりました。パウロの言うことさえ聞いておけば、大きな損失もなかったかもしれないのです。しかしパウロはそれをしつこくがめることはしませんでした。
- ・パウロはそれよりも船員たちに、希望を語ります。その希望は希望的観測ではなく、神さまから与えられたものでした。その確信を元に、パウロは船に乗っているすべての人を導こうとします。
- ・わたしたちも道に迷ったときに欲しいのは、「だからこっちに来いと言ったでしょ」という叱責ではなく、「大丈夫、神さまが守ってくださるから」という約束であり、希望なのではないでしょうか。

(5月 4日)「使徒言行録 23 : 6~11」

パウロがこう言ったので、ファリサイ派とサドカイ派との間に論争が生じ、最高法院は分裂した。

(使徒言行録 23 章 7 節)

- ・ユダヤ教には、大きな二つの勢力がありました。一つはファリサイ派、もう一つはサドカイ派です。パウロはファリサイ派に属していました。この二つのグループには同じユダヤ教であるにもかかわらず、相容れないことがありました。
- ・それはサドカイ派がモーセ五書と呼ばれる創世記から申命記までを正典として認めていたのに対し、ファリサイ派は旧約聖書全体を受け入れていたということです。そのためダニエル書やイザヤ書はファリサイ派だけが正典としていました。
- ・その結果、サドカイ派は天使も復活も霊もないのだと考えていたのです。パウロはそのことを当然知っていました。あえて復活を話題にすることで議会の混乱を狙ったのかはわかりませんが、ファリサイ派の人たちは結果的にパウロ寄りになったようです。

(5月 5日)「使徒言行録 23 : 12~15」

夜が明けると、ユダヤ人たちは陰謀をたくらみ、パウロを殺すまでは飲み食いしないという誓いを立てた。

(使徒言行録 23 章 12 節)

- ・ユダヤ人のパウロに対する怒りはすさまじかったようです。復活の話をしたときにはサドカイ派とファリサイ派の対立を招きましたが、また一致団結してパウロの殺害を願っていきます。
- ・40 人以上の人が、「パウロを殺すまでは飲み食いをしない」と誓いました。そもそも殺人は、律法で禁止されていたはずですが、パウロは神を冒瀆した極悪人だから、命を奪ってもよいと考えたのでしょうか。
- ・40 人もいれば、誰か一人ぐらい違う意見を持っててもよさそうです。しかし怒りという感情は目を曇らせ、正しいものを見えなくするものです。彼らは祭司長や長老たちに、自分たちの思いを強く訴えます。

(5月 6日)「使徒言行録 23 : 16~22」

しかし、この陰謀をパウロの姉妹の子が聞き込み、兵営の中に入って来て、パウロに知らせた。

(使徒言行録 23 章 16 節)

- ・パウロには姉妹がいたようです。そしてその子（パウロの甥）は、ユダヤ人の中に不穏な動きがあるのを聞き、それをパウロに知らせます。その甥も、キリスト者として導かれていたのでしょうか。
- ・彼はローマの兵営の中に入ってパウロにこのことを知らせますが、その行動はかなりの危険を伴っていたことでしょう。下手をすると捕らえられたかもしれません。しかしそのような危険を冒してまでも、パウロを守ろうとしたのです。
- ・パウロの甥である若者は、大隊長に会うことを許されました。大隊長もきちんと話を聞いたようです。彼にはパウロを守りたいという気持ちよりも、もめ事を起こしたくないという気持ちの方が強かったのかもしれませんが。

(5月 7日)「使徒言行録 23 : 23~30」

この者がユダヤ人に捕らえられ、殺されようとしていたのを、わたしは兵士たちを率いて救い出しました。ローマ帝国の市民権を持つ者であることが分かったからです。

(使徒言行録 23 章 27 節)

- ・大祭司の決断は三つでした。一つは夜のうちにパウロを護送するという事です。ユダヤ人たちがパウロの引き渡しを訴え出る前に行動することで、トラブルを回避しようとしたのです。
- ・二つ目は護送を守る兵を配置したということです。歩兵 200 名、騎兵 70 名、軽装兵 200 名という数は、ユダヤで誓いを立てた 40 名に比べるとかなりの人数です。手を出すことすらためらうような兵を、パウロの護衛としてつけました。
- ・そして三つめは、総統フェリクスに手紙を書くということです。彼はパウロを鞭で打とうとしていたにもかかわらず、「兵士たちを率いて救い出しました」と書いています。自らの保身を考えて書かれた文章のように見えます。

(5月 24日)「使徒言行録 27 : 1~8」

ここで百人隊長は、イタリアに行くアレクサンドリアの船を見つけて、わたしたちをそれに乗り込ませた。

(使徒言行録 27 章 6 節)

- ・いよいよパウロは他の囚人と共にイタリアに向けて船出します。「わたしたちは」と書かれているので、パウロには同行者がいたようです。(伝統的にはルカ福音書と使徒言行録を書いた「ルカ」だと言われます。)
- ・パウロたちは百人隊長ユリウスに引き渡されます。彼はローマ兵を率いる人物ですが、パウロに親切にしていたようです。パウロは囚人として扱われていましたが、彼には罪を見いだせないと聞いていたことでしょう。
- ・ローマへの航行は、大変だったようです。向かい風にあい、幾日もの間船足ははかどらず、さらに風に行く手を阻まれました。まるでわたしたちの人生のように、幾多の困難を乗り越えながらパウロは進むのでした。

(5月 25日)「使徒言行録 27 : 9~12」

かなりの時がたって、既に断食日も過ぎていたので、航海はもう危険であった。それで、パウロは人々に忠告した。

(使徒言行録 27 章 9 節)

- ・「良い港」についたときには、かなり当初の予定よりも遅れていたようです。「すでに断食日も過ぎていた」とありますが、断食日はユダヤ暦で 9 月後半から 10 月初旬にあたります。冬の初めです。
- ・その時期から年が明ける 3 月ごろまでは、航海はおこなわれていなかったようです。寒さと風によって、危険だったのでしょうか。パウロはこれまでの宣教旅行の中で、この時期の航海はやめた方がよいと経験していました。
- ・ところが船長や船主は、船出した方がよいと主張します。その理由は、今いる港は冬を越すのに適していなかったからです。少し無理をしてでも、先にあるフェニクス港で過ごす方がよいと思ったのです。その決断は、吉と出るのでしょうか。

(5月 22日)「使徒言行録 26 : 24~29」

パウロがこう弁明していると、フェストゥスは大声で言った。「パウロ、お前は頭がおかしい。学問のしすぎで、おかしくなったのだ。」

(使徒言行録 26 章 24 節)

- ・キリスト教の中で、「理に適っていない」と思われるものはないでしょうか。たとえば聖霊は目に見えず、科学的に証明することができません。また三位一体という考え方も、説明が難しいです。
- ・そしてイエス様が復活されたということ。実際に肉体をもったイエス様が日常的にわたしたちの周りにおられるわけではないので、具体的に伝えることは大変難しいです。しかし多くの人は思っているでしょう。「いや、それでもイエス様は復活されたのです」と。
- ・パウロの言葉を聞いてフェストゥスは、パウロは気が変になってしまったと言います。しかしパウロはそれが伝わらなかったとしても、真っすぐに語ります。そしてあとは神さまにお委ねするのです。

(5月 23日)「使徒言行録 26 : 30~32」

アグリッパ王はフェストゥスに、「あの男は皇帝に上訴さえしていなければ、釈放してもらえただろうに」と言った。

(使徒言行録 26 章 32 節)

- ・アグリッパ王に対するパウロの弁明が終わりました。弁明というよりも、信仰告白という側面が強いものではありましたが。そしてアグリッパ王と共にフェストゥス総督、ベルニケや陪席の人たちも一緒に立ち上がりました。
- ・彼らの判断は、「パウロは死刑や投獄には当たらない」というものでした。ユダヤの人たちが騒いでいるような罪は、パウロには見い出せなかったというのです。そもそもローマの人たちには、パウロをどうしても裁かなければいけないという思いもありません。
- ・しかし彼らは、パウロを釈放することができませんでした。それはパウロが、ローマ皇帝に上訴していたからです。最高裁に訴えられたものを勝手に地方裁判所が裁いてはいけないように、パウロの身柄はローマに預けられるのです。

(5月 8日)「使徒言行録 23 : 31~35」

「お前を告発する者たちが到着してから、尋問することにする」と言った。そして、ヘロデの官邸にパウロを留置しておくように命じた。

(使徒言行録 23 章 35 節)

- ・パウロはエルサレムからカイサリアに連行されました。彼を連行したのは、ローマ兵です。そして総督フェリクスに引き渡され、ヘロデの官邸に留置されました。パウロの身の安全は、一旦保障されました。
- ・ユダヤ人の手からパウロを守ったのは、ローマ兵だったということになります。考えてみると、奇妙な話です。ローマの市民権を持っているから、パウロは守られたのでしょうか。それもあると思います。
- ・しかしそれ以上に、神さまの導きを感じます。わたしたちにも「思いがけず」良いことが起こったり、「思いがけず」意図しなかった道に進んでしまったりということが、あると思います。その背後には、神さまの導きがあるのです。

(5月 9日)「使徒言行録 24 : 1~9」

実は、この男は疫病のような人間で、世界中のユダヤ人の間に騒動を引き起こしている者、『ナザレ人の分派』の主謀者であります。

(使徒言行録 24 章 5 節)

- ・ヘロデの官邸にいるパウロの元に、大祭司アナニア、長老たち、弁護士テルティロがやってきました。それはパウロが到着してから 5 日後のことです。きっといろいろ作戦を立てていたのでしょう。
- ・最初にテルティロが語ったのは、総督フェリクスに対するお世辞でした。社交辞令なのかもしれませんが、まず総督のご機嫌を取って自分たちの言いたいことを言うのです。わたしたちもそういうことをすることはないでしょうか。
- ・そしてパウロのことを「疫病のような人間」だと、訴えます。確かにパウロによって自分たちにとっては厄介な考えが広まったのは事実です。福音の伝達がこのように言われるのは、ちょっと心外です。

(5月10日)「使徒言行録24:10~15」

更に、正しい者も正しくない者もやがて復活するという希望を、神に対して抱いています。この希望は、この人たち自身も同じように抱いております。

(使徒言行録24章15節)

・大祭司アナニアと長老たちの強い思いを、弁護士テルティロは述べました。それに対して、パウロは総督フェリクスの前で弁明します。言い訳ではなく弁明です。真実を正直に語っていくのです。

・パウロがエルサレムに来てから、わずか12日しか経っていないとパウロは語ります。しかし思い返してみるとイエス様は、日曜日にエルサレムに入り、次の金曜日には十字架につけられていました。

・反対者からすると、その日数は全く関係ないのかもしれませんが。エルサレムに入る前から邪魔だと思っていたからこそ、ありとあらゆる理由をつけて、追い詰めようとするのです。しかしパウロは真っ向から、「弁明」していきます。

(5月11日)「使徒言行録24:16~23」

そして、パウロを監禁するように、百人隊長に命じた。ただし、自由をある程度与え、友人たちが彼の世話をするのを妨げないようにさせた。

(使徒言行録24章23節)

・パウロは弁明の中で、「わたしは神に対しても人に対しても、責められることのない良心を保つように、常に努めています」と語ります。それを聞いたフェリクスは、どのように感じたのでしょうか。

・わたしたちもパウロのように、「常に努めています」と言い切ることができればいいと思います。しかしなかなかそういうわけにもいきません。自分の足りない所や弱さを、感じることも多いからです。

・フェリクスは裁判を延期します。「その道はかなり詳しく知っていたから」とありますので、無理に判決を下すともめると思ったのかもしれませんが。フェリクスはパウロを、比較的的自由がある監禁(軟禁状態)の下におきます。

(5月20日)「使徒言行録26:12~18」

それは、彼らの目を開いて、闇から光に、サタンの支配から神に立ち帰らせ、こうして彼らがわたしへの信仰によって、罪の赦しを得、聖なる者とされた人々と共に恵みの分け前にあずかるようになるためである。

(使徒言行録26章18節)

・パウロは迫害者から、宣教者に生まれ変わりました。パウロが回心したという事実も当然あります。しかしそのように導いたのは、他ならぬ神さまです。神さまは、「罪人のかしら」であるパウロを選ばれたのです。

・前の回心物語にはなかった「突き棒を蹴ると痛い目に遭うものだ」ということわざのようなものが、何を意味しているのかはよく分かりませんが、えてしてこのような体験談は少しずつ話が膨らんでいく傾向にあります。

・そしてパウロは、どうして神さまが自分を遣わされたのかについても語ります。それは、「彼らの目を開いて、闇から光に、神に立ち帰らせる」ということです。その「彼ら」の中には、アグリッパ王も含まれているのかもしれませんが。

(5月21日)「使徒言行録26:19~23」

つまり私は、メシアが苦しみを受け、また、死者の中から最初に復活して、民にも異邦人にも光を語り告げることになると述べたのです。

(使徒言行録26章23節)

・パウロはアグリッパ王に対し、自分は「天からの啓示」に背かず、宣教してきたと語ります。天からの啓示とは、「あなたをこの民と異邦人の中から救い出し、彼らのもとに遣わす」というものでした。

・神さまはわたしたちを、それぞれの場所に遣わされます。でもそれが本当に神さまの導きなのか、不安なときもあります。それでも、「蒔かれた場所で咲こうとする」ことが大切なのでしょう。

・パウロはアグリッパ王に、すべて語り終えました。その内容は命乞いではなく、神さまの恵みを証しするものでした。自分の身の危険も顧みずに福音を伝えるこの姿に、少しでも学ぶことができればと思います。

(5月18日)「使徒言行録26:4~8」

神が死者を復活させてくださるということを、あなたがたはなぜ信じ難いとお考えになるのでしょうか。

(使徒言行録26章8節)

- ・パウロはまず、自分がファリサイ派として敬虔な生活を送って来たことを語ります。彼はユダヤ教の中でも最も厳格な派であるファリサイ派の一員として生活をしてきました。律法も忠実に守っていました。
- ・またユダヤ12部族は、散らされた民がまた神さまの元に集められるという希望を抱いていました。その日に神さまの前に立てるように、彼らは普段からいつも清い生活を心がけていたのです。
- ・しかしそれは、表面を白く塗っているだけにすぎないことを、パウロはまた知っていました。自分の弱さを知っているからこそ、「完璧」を求めた生活だけでは足りないことに気づいたのではないのでしょうか。

(5月19日)「使徒言行録26:9~11」

また、至るところの会堂で、しばしば彼らを罰してイエスを冒瀆するように強制し、彼らに対して激しく怒り狂い、外国の町にまでも迫害の手を伸ばしたのです。」

(使徒言行録26章11節)

- ・パウロは何度も、自分は元々キリスト者を迫害していた者だということを告白します。「正しい」と思ってやっていたこととはいえ、本当は人に知られたくないことでしょう。しかしパウロはそれを隠しません。
- ・アメージング・グレイスという歌を作詞したジョン・ニュートンは、イギリスの海軍兵士から奴隷商人になった人物でした。しかし神さまとの出会いの中で回心し、のちに牧師になります。
- ・その歌の中で彼は、「驚くべき恵み、わたしのような者を救って下さった。かつては迷ったが、今は見つけられ、かつては見えなかったが、今は見える」と歌います。パウロも神さまの導きの中で変えられ、生かされるのです。

(5月12日)「使徒言行録24:24~27」

しかし、パウロが正義や節制や来るべき裁きについて話すと、フェリクスは恐ろしくなり、「今回はこれで帰ってよろしい。また適当な機会に呼び出すことにする」と言った。

(使徒言行録24章25節)

- ・フェリクスはユダヤ人の妻ドルシラと共に、パウロの話を受けます。パウロは信仰の話とともに、正義や節制や来るべき裁きについて語ります。フェリクスが恐ろしくなるのもよくわかります。
- ・洗礼者ヨハネも首をはねられる前、ヘロデに捕らえられていました。そのときヘロデはヨハネの教えを聞いて非常に当惑しながらも、喜んで耳を傾けていました。その場面を少し思い出してしまいます。
- ・ただフェリクスには、下心もあったようです。パウロから良い教えを聞くというよりも、お金をもらうことが目的だったようです。あわせてユダヤ人の機嫌も取るうとして、パウロの監禁状態を続けていきます。

(5月13日)「使徒言行録25:1~5」

「だから、その男に不都合なところがあるというのなら、あなたたちのうちの有力者が、わたしと一緒に下って行って、告発すればよいではないか」と言った。

(使徒言行録25章5節)

- ・パウロがカイサリアで監禁されて、二年の月日が経ちました。総督フェリクスの後任として、フェストゥスが就任しました。名前が似ているので混乱してしまっていますが、ユダヤ人にとってはパウロを告発する好機と考えることもできます。
- ・早速、祭司長やおもだった人々はエルサレムにやって来たフェストゥスに、パウロをエルサレムに送り返すように願い出ます。しかしフェストゥスはパウロがカイサリアに連れて来られたいきさつを知っていたのでしょう。
- ・「問題があるなら、自分と一緒にカイサリアに行き、そこで告発しなさい」とフェストゥスは語ります。こそこそと裏工作をするのではなく、正々堂々と主張したらいいのではないかと、極めて正論をぶつけるのです。

(5月14日)「使徒言行録25:6~12」

そこで、フェストゥスは陪審の人々と協議してから、「皇帝に上訴したのだから、皇帝のもとに出頭するように」と答えた。

(使徒言行録25章12節)

・フェストゥスがカイサリアに戻るときに、ユダヤの人たちもエルサレムから下って来たようです。彼らはパウロに関して、ありとあらゆる重い罪状を言い立てます。彼らはパウロを憎むがあまり、何とかしてパウロを罪人に仕立てようとするのです。

・わたしたちも、ある人のことが嫌いだから、その人の為すことすべてが悪い事であるかのように感じるがあると思います。「罪を憎んで人を憎まず」ということを、考えていきたいと思います。

・パウロは裁判の席で、皇帝に上訴することを伝えます。皇帝とはローマ皇帝のことで、当然ローマにいます。パウロの計算だったかどうかはともかく、パウロの前にローマへの道が開かれるのです。

(5月15日)「使徒言行録25:13~22」

そこで、アグリッパがフェストゥスに、「わたしも、その男の言うことを聞いてみたいと思います」と言うと、フェストゥスは、「明日、お聞きになれます」と言った。

(使徒言行録25章22節)

・アグリッパ王は、12章で亡くなったヘロデ王の息子です。またベルニケはアグリッパ王の姉妹でした。彼らはフェストゥス総督に挨拶をするために、カイサリアまでやってきました。

・フェストゥスは、パウロの件をアグリッパ王に伝えます。パウロがエルサレムから来たこと、ユダヤ人たちに訴えられていること、しかしパウロに罪は認められなかったこと、それらのことをフェストゥスは語ります。

・そして十字架で死んだイエス様が生きているということを、パウロが語っていることも伝えます。アグリッパ王はそこに興味を持ったのでしょうか。パウロと直接語りたくて希望します。パウロにとって、大きな宣教のチャンスになるのかもしれませんが。

(5月16日)「使徒言行録25:23~27」

しかし、彼が死罪に相当するようなことは何もしていないということが、わたしには分かりました。ところが、この者自身が皇帝陛下に上訴したので、護送することに決定しました。

(使徒言行録25章25節)

・アグリッパ王とベルニケ、そして大隊長や町の有力者たちが謁見の間に来ました。そこにパウロは引き出されます。フェストゥスにはローマの市民権を持つパウロを裁きたくない気持ちと、ユダヤ人たちを怒らせたくないという両方の思いがありました。

・パウロが上訴しているのでそのままローマに身柄を移せばいいのですが、罪状がはっきりしていません。かといって無罪だから放免、というわけにもいきません。そこでフェリクスはアグリッパ王に判断させようとするのです。

・自分で判断できないことを人に任せるということは、わたしたちにもあります。しかし自分の保身を第一に考えて他の人の意見を利用するのは、どうなのでしょう。巻き込まれる人がかわいそうです。

(5月17日)「使徒言行録26:1~3」

王は、ユダヤ人の慣習も論争点もみなよくご存じだからです。それで、どうか忍耐をもって、私の申すことを聞いてくださるようお願いいたします。

(使徒言行録26章3節)

・パウロはアグリッパ王の前で、弁明する機会が与えられました。こういうとき、わたしたちだったらどのようなことを語るでしょうか。「わたしは無罪です!」、「ユダヤ人がひどいんです!」。

・わたしたちだったらきっと、自分が解放されることをまず目標にして、一生懸命語ると思います。しかしパウロはそうはしませんでした。パウロは自分のこれまでの生き方について、語り出します。

・そしてその中でイエス・キリストに出会い、変えられたことをアグリッパ王に伝えるのです。パウロのこの弁明は、彼による宣教でした。自分の信仰を、一切隠すことなく伝えていくのです。